

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00718

研究課題名（和文）1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討

研究課題名（英文）Historical Study on Awakening of the Southwest Chinese Ethnic Elites around 1949

研究代表者

吉開 将人（YOSHIKAI, Masato）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：80272491

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,600,000円

研究成果の概要（和文）：本科研は、西南中国の民族エリートたちが、中華人民共和国建国に前後していかなる社会的現実の中を生き、それによっていかなる政治的選択をするに至ったのかという問題について、歴史学的に解明を試みることを目的とした、学術的な研究プロジェクトである。吉開は、彝族エリートの楊砥中についての研究を完了し、同時に烏居龍蔵による苗族・彝族調査資料を近代史研究史料として用いた研究を試み、それぞれを成果として発表した。松本・川田・清水は、回族・チベット族・彝族について成果を発表、あるいは発表に向けた準備を終えた。岩谷は、政治史・軍事史の専門家としての立場から吉開らの研究に助言を与え、自らも関連成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀前半の中国には、漢民族の場合と同様、近代教育による啓蒙、革命への参加などを経て、歴史の転換の波に乗り、新たな社会上昇の機会を得た非漢民族エリートが少なくなかった。ところがこの問題をめぐって、北方・西北地域については研究が盛んだが、西南中国についての研究は立ち遅れている。また時期的には、抗戦期から中華人民共和国建国初期にかけての時期（1937～1950年代）については研究がきわめて乏しい。こうした研究状況の中で、西南中国各地の非漢民族を専門とする研究者たちが、政治史・軍事史の研究者と共同し、学術的な解明を試みた本科研は、大きな学術的意義を持ち、所期の成果を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This is an academic research project that aims to historically study the question of how the ethnic elites of Southwest China lived through before and after the founding of the People's Republic of China, and what kind of political choices they made as the result. YOSHIKAI completed his research on the life history of YANG Dizhong, an Yi ethnic elite who was active in Guizhou, Yunnan, and Sichuan during the Republican period, at the same time, he attempted to use the results of TORII Ryuzo's research on the Miao and Yi peoples as historical materials for modern history research and published several articles as the result of this attempt. MATSUMOTO, KAWATA, and SHIMIZU published their research results on the Hui, Tibetan, and Yi peoples, or completed preparations for the publication. IWATANI gave advice to YOSHIKAI and others on their research as a specialist in political and military history, and he himself published related results.

研究分野：歴史学

キーワード：中国 歴史 近現代 民族 西南中国 民族エリート

1. 研究開始当初の背景

2018年4月の研究開始当初の背景は以下の通りである。

研究代表者の吉開は、2004～2006年度に研究代表者として科研(若手研究(B))「戦前日本における「南支那」論と学術研究」(課題番号:16710171)を推進する中で、明治日本の東洋学者たちが、西南中国(現四川・雲南・貴州・湖南西部)辺境に暮らす非漢民族(少数民族)の「苗(ミャオ)族」と呼ばれる民族集団を中国大陸最古の先住民族と見なし、漢民族は後からやって来た征服者であると解釈する歴史観によって中国民族史を論じていたことに注目した(YOSHIKAI, “One Century of Bronze Drum Research in Japan”, *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, No.49, 2005, pp.23-40)。「黄河文明」「中国四千年の歴史」が半ば常識化した今日から見れば、それは荒唐無稽な奇説でしかない。ところがこの当時、民族学者の鳥居龍蔵が西南中国において日本人初の民族調査を敢行し、現実の苗族についての最新情報を持ち帰ったことともあいまって、この民族史論が明治日本で強い影響力を持ち広く流布したことが、科研による研究成果として明らかになった(吉開「歴史学者と「南支那」」松浦正孝編『昭和・アジア主義の実像 帝国日本と台湾・「南洋」・「南支那」』ミネルヴァ書房、2007年、54～77頁)。以上の成果を総合して、さらに一篇の論文を発表したのだが(吉開「苗族史の近代 漢族西來說と多民族史観」『北海道大学文学研究科紀要』124、2008年、25～55頁)執筆過程でこの中国民族史論が、他者としての日本人だけではなく、漢民族知識人、さらには苗族知識人・苗族エリートたちによっても自己の民族アイデンティティとの関係において積極的に語られていたという事実に気付いた。そして、近代中国を生きたこれらの多様な主体が、それをどのように中国史の中に位置付けようとしてきたのかについて分析することで、20世紀を通じた中国民族論の複雑な形成過程が明らかになると確信した。こうして、当初は明治日本に軸足を置いた学術史的検討に過ぎなかった本研究課題は、清末・中華民国期における中国民族論の変容を、苗族についての歴史言説に注目して分析する思想史的研究へと性質を変えた。そしてその成果として、一連の長篇論文を発表したのである(吉開「苗族史の近代(続篇)～(7)」『北海道大学文学研究科紀要』127・129・130・131・132・134、2009～11年、81～121・29～84・1～61・1～51・49～138・1～55頁)。

その後、中国民族史論に注目した研究関心を20世紀後半の中華人民共和国と中国共産党(以下「中共」)による諸政策にまで広げるようになった(吉開「歴史学者と国土意識」飯島渉責任編集『シリーズ20世紀中国史(2) 近代性の構造』東大出版会、2009年、81～102頁、同「中国民族論と抗戦下の雲南 現地調査報告」『史朋』43、2010年、18～41頁、同「民族起源学説在二十世紀中国」『復旦学報(社会科学版)』5、2012年、30～40頁、同「中国民族史像と考古・歴史ナショナルリズム」『歴史と地理』679(世界史の研究241)2014年、1～14頁)。そして2015～2017年度には、研究代表者として科研(基盤研究(C))「中国共産党と多民族史論」(課題番号:15K02886)を推進し、明治・清末以来の苗族史論が、現今の中国民族主義思想の形成にも一定の影響を及ぼしていること、またそれが今日の苗族エリートたちによっても信奉されて中国民族問題の隠れた焦点の一つとなっていることを発見し、研究成果を発表した(吉開「「タク鹿」の歴史は誰のものか 「炎黄」顕彰問題と20世紀末中国民族主義の諸相」『北海道大学文学研究科紀要』150、2016年、1～75頁)。

さらにこの間の2012～2014年度には、後に本科研で研究分担者として迎えることになる松本ますみ氏が科研(基盤研究(B))「1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究」(課題番号:24320143、研究代表者:松本)を主宰し、そこに研究分担者として参加する機会を得た。そしてこの科研で、北方の回族、蒙古族、朝鮮族を専門とする諸氏と交流する中で、中国周縁諸地域の比較という新たな視座を得て、以前の「苗族史の近代」研究では学術史・思想史的な関心から検討したに過ぎなかった1920～1930年代という時期に、再び向き合うことになったのである。その結果、地政学面でこの時期の西南中国が歴史的にきわめて重要な位置を占めており、当時およびその後の歴史的展開に対して、苗族だけでなく、その他の民族集団を含めた西南中国各地の非漢民族エリートたちが大きな役割を果たしたこと、さらに彼ら西南中国の非漢民族エリートを取り込むことの成否が、1949年の中華人民共和国建国前後において、中国国民党(以下「国民党」)政権と中共政権とによる抗争(以下「国共内戦」)の帰趨を決定したことが明らかとなり、研究成果を発表した(吉開「「羈縻」政策と二十世紀中国 第二野戦軍「關於少数民族工作指示(草案)」から見た西南民族エリート問題」松本ますみ編『1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究』2015年、91～117頁)。

20世紀中国史を通観することができるようになり、また中国周縁地域を横断的に見る視座を得て西南中国特有の歴史性に注目するようになる中で、痛感したのは、苗族だけではなく西南中国の苗族以外の非漢民族エリートについても、相互の関係性を含めて具体的な動向を明らかにすべきこと、また歴史に関する言説だけを切り取って学術史・思想史を論じるのではなく、彼らが過去に置かれていた実際の社会状況や、その背景としての各種制度・政策の問題に目を向ける

必要があることであった。以後、もともとの苗族という関心の枠を越え、20世紀前半の中国において各種の「覚醒」を経験した苗族・彝(イ)族など、当時「苗民」「夷人」などと呼ばれ「苗夷」あるいは「夷苗」と総称されていた西南中国の多様な非漢民族のエリート層に広く注目し、彼らの動向と彼らが実際に身を置いていた社会の実態を、それぞれの時期の制度や政策と関連付けて具体的に明らかにすることに、研究の重点を置くようになったのである(吉開「楊砥中と民国晩期の西南中国 忘れられた西南民族の「領袖」」『北大史学』57、2017年、68~94頁)。

こうした背景の下、本科研の研究代表者である吉開は新たな研究プロジェクトとして、専ら西南中国に光を当て、1949年の中華人民共和国建国を越えてそれを挟む前後の時期を通観しながら、西南中国各地の非漢民族社会のあり方を比較検討し、当該時期の歴史的展開の中で全体を俯瞰して、「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨」について検討を試みることを構想するに至った。しかしながら、西南中国は広く、多様な民族集団を含んでいる上に、非漢民族エリートの動向の背景には当時の複雑な政治史・軍事史があり、その理解が不可欠である。吉開は以上述べた展開をたどってこの研究構想に至ったため、苗族以外については理解を欠き、当時の政治史・軍事史についても理解が不十分であり、一人で遂行できる見込みはない。そこで自らが研究代表者となり、これらの各分野の第一人者で自らと交流があった松本ますみ・川田進・清水享・岩谷將の諸氏を研究分担者として迎え、共同研究として本科研を始動させたのである。

2. 研究の目的

西南中国の非漢民族エリートに主眼を置く歴史学研究的プロジェクトとして、本科研は以上の経緯で始動した。研究の目的は、西南中国の各民族集団のエリート層が、1949年を跨ぐ時期に、いかなる社会的現実の中を生き、それによっていかなる政治的選択をするに至ったのかという問題について、各地域(民族)・各分野を専門とする研究者が協力し、歴史学的に解明を試みることにあった。

20世紀前半の中国辺境には、同時期の漢民族の場合と同様、近代教育による啓蒙、革命への参加などを経て覚醒し、歴史の転換の波に乗り、新たな社会上昇の機会を得た非漢民族が少なくなかった。一方で、それらの非漢民族エリートたちの中にはもともと伝統社会において特権的な身分を持っていた者も少なからず含まれていて、彼らの動機には、新たな社会上昇の機会を得ることで、旧来の特権的身分に代わる地位を手に入れようとする意図も存在した。20世紀前半の中国辺境社会は、非漢民族エリートたちのこうした多様な思惑が錯綜する、きわめて複雑な情勢の中にあつたのである。

この時期の非漢民族エリートについては、地域的に見ると、中華民国を創業した孫文による「五族共和」のスローガンの、漢民族を除いた満(満洲)・蒙(モンゴル)・蔵(チベット)・回(部=新疆)など、北方・西北地域の研究がきわめて盛んである。ところが、「五族」の枠の外にあつた西南中国の非漢民族についての研究は、大きく立ち遅れている。また時期的に見ると、清末・辛亥革命期や北京政府・南京国民政府期(1900~1937年)については研究が盛んだが、抗戦(日中戦争)期から中華人民共和国建国初期にかけての時期(1937~1950年代)については研究が乏しい。

西南中国は抗戦(1937~1945年)・国共内戦(1946~1950年)において、国共両政権にとっての最後の砦、最後の決戦の舞台となつた場所であり、当該時期の歴史においてきわめて重要な役割を果たした。そこに暮らす非漢民族、とりわけそのエリート層の覚醒と帰趨は、二つの戦争の勝敗のみならず、後に中共政権がチベット本土を含む辺境統治を確立し、さらには南方国境を画定する上でも、非常に大きな影響を及ぼすものだったのである。

西南中国の非漢民族エリートに主眼を置き、中華人民共和国が建国された1949年を跨ぐ時期を研究対象とし、彼らの覚醒と帰趨について歴史学的に検討することを、本科研が研究の目的とするのは、以上の理由によるものである。

3. 研究の方法

(1) 課題設定

中国近代史上の諸問題については、1949年を跨ぐ時期の歴史が国共両政権の二つの異なる時代に関係するため、中国国内では前後切り離して議論されることが原則である。そして、そもそも中国国内では、中共側の人物や後に名誉回復された人物の事績、あるいはその関連事件以外には、歴史的に検討されることがない。そうした中であつて、中共がこの時期の西南中国の非漢民族エリートについて真正面から取り上げるのは、中華人民共和国の建国初期までに中共による「統一戦線(懐柔連携)」工作の対象となつた「反封建」「抗日愛国」人士として、あるいは敵対して「剿匪(匪賊鎮圧)」「民主改革」の対象となつた「匪首」「土豪劣紳」としてのどちらかであり、いずれも強い政治性を持つ。関連する研究についても、「統一戦線」という文脈で行われるものと、「民主改革」という文脈で行われるものが、それぞれ別の目的を持って世に出されている。そのために、この時期を生きた広範な非漢民族エリート層を、1949年前後に際した彼らの選択如何でふるいにかけることなく、歴史的に客観視しようとする研究は、皆無と言うべき状

況にあったのである。

21世紀初めになり、イデオロギーの呪縛が緩んだ中国国内では、従来は批判の対象でしかなかった国民党政権による政策と成果を客観視しようとする、民国史ブームというべき学術状況が出現した。それにより、当時の辺境の動向に歴史学的関心を寄せる中堅・若手研究者たちが現れ、西南中国の非漢民族エリートについても、なおも少数だが優れた業績が見られるようになった。これらについては、丁寧な史料分析を通じて実証的に史実を明らかにすることに成功しているという点で、学ぶべきところが少なくない。

しかしながら、それらにも以下の二つの問題がある。第一に、それらは各事例を分析する際に、国民党政権の「同化」(漢化)政策という特徴を重視し、1949年以後の中共民族政策との対比を図るといった議論の方法を採用している。その結果、いくつかの研究成果は、「同化」政策によってかえって西南中国の民族エリートたちの中で省籍や民族区分を越えた不満の共感や連帯が顕在化したという事実を明らかにしているにもかかわらず、特定の民族集団あるいは特定の省・地域のみを分析対象とし、禁欲的に論じるにとどめているのである。第二に、それらのほとんど全ての論考は、従来の研究と同様に、1949年をもって思考を停止している。ごく最近になり、民国期西南中国の非漢民族エリートの動向を、1949年以後の展開を視野に入れながら、全体で一連の問題として検討する試みが現れている。しかし、やはり分析対象は特定の民族集団あるいは特定の省・地域に限定されていて、少なくとも、西南中国全体で彼らの広汎な動態を論ずる方向には展開し得ないものである。

以上の研究動向から帰納されるのは、「同化」政策として批判(あるいは評価)されてきた国民党政権の民族政策がもたらした現実的状况の多様さを当時の非漢民族エリートたちの実態に即して明らかにすること、今日的な民族区分を相対化して当時の民族エリートたちの同時代的アイデンティティの中で各種問題の再分析を試みること、省籍や今日的民族区分に拘泥せず、それを越えた連帯の動きに目を向けること、以上3点について1949年を跨ぐ視点で歴史的に一連のものとして考察すること、以上四つの課題である。

(2) 研究資料

このように課題が明らかになった後に意識されたのは、我々外国人研究者が、研究課題として選択の自由を持つ一方で、研究資料について現実的な困難を抱えていることであった。文献史料について言えば、中国国内の地方各地に所蔵される档案(文書)史料が、上記課題の研究においては最も基礎となる。ところが、昨今の政治状況にあって各種制限が強化される中、中国国内の第一線の研究者でも、今や地方档案馆の系統だった利用はきわめて困難となっている。外国人研究者が地方档案を深く利用するのはもはや不可能と見るべきであり、档案などの史料の調査には特に慎重な態度が必要で、当然ながら中国国内の研究者の協力も期待すべきではない。

そこで本科研では、近年公開が進む台北の民国档案(国史館ほか所蔵)および南京で対外的に公開された民国档案(中国第二歴史档案馆所蔵)を基礎に、中国国内各地ですでに刊行された各種刊行物の中の記事を網羅的に収集して徹底的な史料考証を加え、上記の民国档案との整合利用を図るといった戦略(「史料批判主義的再検討」)を採用することにした。

刊行物の中で積極的に利用したのは、中国各地で主に「文史資料」という扱いで刊行されることの多い党外人士の回顧録、地方当局各レベル刊行の各種「党史」「地方志」、および1950年代の「少数民族社会歴史調査」などの「民族誌」であった。

「文史資料」は口述史料の一種と言えるが、中共に対する自己弁護の目的意識の下で書かれたものが多いので、記述をそのまま鵜呑みにすべきではない。しかし、「党史」「地方志」などの各種史料中の断片的な記事や、台北・南京所蔵の民国档案の記述などと緻密に対比し、丹念に検討することで、「文史資料」の中の採用すべき「記憶」と、切り捨てるべきあるいは読み替えるべき「記憶」を区別し、史実に迫ることができると考えるに至った。

また上述の通り、今日の中国国内では、中共側の人物や後に名誉回復された人物の事績、あるいはその関連事件以外には、歴史的に正当な評価は与えられない。ところが、この評価に当てはまらない非漢民族エリートについても、各地で刊行されている「文史資料」「党史」「地方志」などの各種史料を丁寧に見ると、中共が「長征」で敵対した「土豪劣紳」「民主改革」で打倒した「封建勢力」などとして、文字記録されている例が少なくないことに気付くのである。

一方で、西南中国に対して「同化」主義をとっていた民国政府は、档案中で非漢民族エリートに言及する場合、その民族帰属に必ずしも言及しないことが通例である。また今日の中国国内においても「党史」「地方志」で中共に敵対した非漢民族エリートに言及する場合には、民族融和を図る必要性から、その民族帰属に言及しないことが通例である。ところが「文史資料」「民族誌」などで1949年以前の非漢民族エリートに言及する場合には、必ず民族区分を明らかにしている。中共による1950年代の「民族識別」政策の産物である民族区分を、それ以前の過去にまでさかのぼらせて記述してあること自体が問題視すべき点であるのは言うまでもない。しかしながら、少なくともそれを手掛かりとすることで、民国档案や「党史」「地方志」の中の、一見ただけでは無関係に見える記事が、実際は西南中国に生きた非漢民族エリートの動向を示す貴重な史料である可能性が浮かび上がるのである。

さらに本科研では、こうした「史料批判主義的再検討」の成果に、可能な限り、現地調査での聞き取りの成果も重ね合わせて照合し、考証を試みるという方法を採用した。本研究が扱う1949年を跨ぐ時期は、現在ならまだかろうじて聞き取りが可能な時代に属す。現地の古老の談話から

は、「地方志」などに記録されない古跡・碑文の発見が可能となった。聞き取りの成果を文献史料に対する考証の成果と照らし合わせてさらに検証を試みることによって、文献に残らない史実の掘り起こしが実現されたのである。

4. 研究成果

以上では、研究開始当初の背景、研究の目的、そして研究の方法、特に研究史、研究動向を踏まえた課題設定、および「史料批判主義的再検討」という研究手法について述べた。

本科研は、こうした経緯と目的意識、方法を、研究代表者の吉開と、研究分担者の松本・川田・清水・岩谷が共有し、それぞれの専門を基礎に、分担する分野で成果を得ることを目指して始動した。分担は、吉開が貴州・雲南・四川省境界地域の夷苗（今日の彝族・苗族）エリートに関する研究と全体の成果のとりまとめ、松本が回民（今日の回族）エリート、川田が旧西康省康属（今日の四川西部）のカムパ（今日の四川藏族）エリート、清水が旧西康省寧属（今日の四川涼山）の夷人（今日の彝族）エリート、さらに以上の専ら民族史に関心を置く研究者による成果に対し、政治史・軍事史を専門とする岩谷がそれぞれの歴史的背景となる問題について指摘、史料や研究方法に関する助言を行ない、あわせて政治史・軍事史に関する自らの研究を進める、というものであった。

個々の研究は、各人に対する分担によって計画的に遂行されたが、個別の成果と研究情報を研究組織全体で共有し、共同研究の進捗状況を総括する機会も設けた。

初年度は、本科研始動から間もない2018年5月26日に第289回北海道大学東洋史談話会として、新規科研プロジェクト「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討」キックオフ・ミーティングを開催し、各人がこれまでの研究実績を踏まえて報告を行ない、以後3年間の個別の研究計画を説明し、全体で討議した。

第2年度は、キックオフ・ミーティング後の個別の成果を持ち寄り、2019年6月29日に研究打ち合わせ会を開催して成果を報告、2019年度の個別の研究計画を説明し、全体で討議した。加えて、2019年10月12日に第296回北海道大学東洋史談話会として科研プロジェクト「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する資料批判主義的再検討」秋季集会を開催、大型台風の直撃で予定変更を余儀なくされたが、参加できた者はこの間の成果を発表、さらに今後の個別の研究計画を説明し、全体の討議を経て、第3年度は成果の集大成として海外の研究者もコメンテーターに迎えて大型のシンポジウムを開催し、その内容をもとに成果報告書として論文集を出版することが計画されるに至った。

ところが、周知の通り、この第2年度は、年を越して2020年を迎えた段階で、我々の科研の主対象地である中国国内においてコロナ禍が発生し、その被害と影響はわが国にも及んで今日に至る大混乱を引き起こした。さらに本科研の副次的対象地である台湾も門戸を閉ざし、台北所蔵の民国档案調査さえも不可能な状況になった。こうして、本科研で各メンバーが年度下半期に計画していた中国国内および台湾での海外調査のみならず、日本国内各地での史料調査、さらには研究打ち合わせを含む研究集会の開催さえも不可能になったのである。その結果、調査旅行に残っていた旅費は、それまで海外調査を優先して控えめに購入していた文献史料などの研究資料の購入費用に振り替えて有効利用を図ること、そしてこれまでの研究成果を着実に取りまとめることを、各メンバーに指示した。さらにこの状況が第3年度まで続くものと判断し、第2年度の年度末の段階で早々に、先に計画したシンポジウムの開催をあきらめ、それと連動して論文集の刊行も断念し、すでに出版の同意を得ていた出版社にも急遽その旨を連絡して了解いただくことになった。

こうした現実の中で始まった第3年度は、新年度開始早々に、海外渡航を含む調査旅行を自粛し、情報の交換はインターネット環境を利用して相互に行ない、成果は代表者が集約してメンバー間で共有することを決定した。計画は大きな変更を余儀なくされたが、海外調査に予定していた経費をメンバー各人の研究資料の購入費用と、これまでの2年間で蓄積した調査データの整理費用に振り向けることで、かえって分析作業と成果の執筆作業に専念できたことを特記しておきたい。

その結果、研究代表者の吉開は、民国期に貴州・雲南・四川地域で活躍した彝族エリートの楊砥中に関する長篇論文の前半生部分を完結させ、同時に鳥居龍蔵による苗族・彝族調査成果を近代史研究史料として用いた研究を試みて論文として発表した。研究分担者の松本・川田・清水はそれぞれの分担の回族・チベット族・彝族について成果を発表、あるいは発表に向けた準備を終えた。研究分担者の岩谷は、政治史・軍事史の専門家としての立場から吉開・松本・川田・清水の研究に助言を与え、また自らも関連成果を発表した。個々の研究成果は多岐に渡り、紙幅の制約のために網羅的に記述して紹介することは不可能であるので、次頁以下に示す業績一覧を参照していただきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 吉開 将人 | 4. 巻 163 |
| 2. 論文標題 「夷苗」連帯の夢：「西南辺疆土司民衆代表」楊砥中伝（前篇再続） | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 北海道大学文学研究院紀要 | 6. 最初と最後の頁 1-66 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/bfhhs.163.r1 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 松本 ますみ | 4. 巻 102 |
| 2. 論文標題 唯物論の神はイスラームグッズを祝福し給う：世界の工場 中国の経験を垣間見る | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 CIRAS Discussion Paper | 6. 最初と最後の頁 25-34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 岩谷 将 | 4. 巻 69(2) |
| 2. 論文標題 蒋介石のなかの日本（下） | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 海外事情 | 6. 最初と最後の頁 153-166 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 岩谷 将 | 4. 巻 69(1) |
| 2. 論文標題 蒋介石のなかの日本（中） | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 海外事情 | 6. 最初と最後の頁 153-166 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 岩谷 将 | 4. 巻 68(6) |
| 2. 論文標題 蒋介石のなかの日本(上) | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 海外事情 | 6. 最初と最後の頁 151-163 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 松本 ますみ | 4. 巻 10 |
| 2. 論文標題 「宗教中国化」、「宗教リスク論」の中で変容する回族コミュニティ：寧夏回族自治区を例に | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 研究中国 | 6. 最初と最後の頁 45-54 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 吉開 将人 | 4. 巻 998 |
| 2. 論文標題 現代中国における遺跡・神話をめぐる政治力学：「タク鹿」の歴史は誰のものか | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 歴史学研究 | 6. 最初と最後の頁 25-37 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 吉開 将人 | 4. 巻 159 |
| 2. 論文標題 「夷苗」連帯の夢：「西南辺疆土司民衆代表」楊砥中伝(前篇続) | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 北海道大学文学研究院紀要 | 6. 最初と最後の頁 1-60 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.14943/bfhhs.159.r1 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 吉開 将人 | 4. 巻 157 |
| 2. 論文標題 「夷苗」連帯の夢：「西南辺疆土司民衆代表」楊砥中伝（前篇） | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 北海道大学文学研究科紀要 | 6. 最初と最後の頁 1-47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/bgs1.157.r1 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 川田 進 | 4. 巻 49 |
| 2. 論文標題 東チベットにおける統一戦線活動と政教関係：キルティ寺とラルン五明仏学院を中心に | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 中国21 | 6. 最初と最後の頁 91-109 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 松本 ますみ | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 Islamic and Chinese Peripheral Studies in Imperial Japan | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 中国の「一帯一路」構想の系譜とエスニシティのネットワークを介した対外文化戦略の研究（平成28年度～30年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）研究成果報告書） | 6. 最初と最後の頁 26-35 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 松本 ますみ | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 「一帯一路」構想と「宗教の中国化」のほざまにある「逆さまの平和主義」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 中国の「一帯一路」構想の系譜とエスニシティのネットワークを介した対外文化戦略の研究（平成28年度～30年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）研究成果報告書） | 6. 最初と最後の頁 138-158 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 清水 享 | 4. 巻 231 |
| 2. 論文標題 彝語・彝文の辞書について | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 アジア遊学 | 6. 最初と最後の頁 39-53 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 4件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 吉開 将人 |
| 2. 発表標題 鳥居龍蔵の学術遺産と中国研究：成果の紹介と若干の提言 |
| 3. 学会等名 鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム 鳥居龍蔵と現代社会：その学問と資料の意義を問う (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 松本 ますみ |
| 2. 発表標題 中国のムスリマとヘジャブの意味 |
| 3. 学会等名 イスラーム・ジェンダー科研「記憶と記録にみる女性たちと100年」研究会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 松本 ますみ |
| 2. 発表標題 唯物論の神はイスラームグッズに祝福を与え給う：世界の工場、中国の経験を垣間見る |
| 3. 学会等名 新学術領域研究「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立」B01「規範とアイデンティティ：社会的紐帯とナショナリズムの間」ワークショップ (招待講演) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 吉開 将人 |
| 2. 発表標題 黔テソ川三省境界地域の彝族土司後裔に関する現地調査成果と“紅軍游撃隊”関係史料問題 |
| 3. 学会等名 第296回北海道大学東洋史談話会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 清水 享 |
| 2. 発表標題 国史館における史料収集(2019年8月) |
| 3. 学会等名 第296回北海道大学東洋史談話会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 吉開 将人 |
| 2. 発表標題 史料考証与「民族、族群」研究：学術史、思想史以及非漢族精英研究 |
| 3. 学会等名 「民族、族群与社群的研究反思」学術研討会（中央研究院歷史語言研究所）（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 川田 進 |
| 2. 発表標題 Contemporary Tibet: CCP's Religious Policies and Emergence of Religious Space in Eastern Tibet |
| 3. 学会等名 Brown Bag Lecture (Columbia University Weatherhead East Asian Institute) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 岩谷 將 |
| 2. 発表標題 中日戦争初期日本の謀和工作 |
| 3. 学会等名 中国社会科学院近代史研究所（研究報告）（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 吉開 将人 |
| 2. 発表標題 1949年前後の西南中国に関する「史料批判」の諸相 |
| 3. 学会等名 新規科研プロジェクト「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討」キックオフ・ミーティング（第289回北海道大学東洋史談話会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 岩谷 將 |
| 2. 発表標題 西南地区「解放」をめぐる国共両党の角逐 |
| 3. 学会等名 新規科研プロジェクト「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討」キックオフ・ミーティング（第289回北海道大学東洋史談話会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 松本 ますみ |
| 2. 発表標題 1930年代から40年代の雲南の回民実力者たち：19世紀末、杜文秀蜂起失敗 |
| 3. 学会等名 新規科研プロジェクト「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討」キックオフ・ミーティング（第289回北海道大学東洋史談話会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 川田 進 |
| 2. 発表標題 東チベットの民族エリートと地域研究 |
| 3. 学会等名 新規科研プロジェクト「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討」キックオフ・ミーティング（第289回北海道大学東洋史談話会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 清水 享 |
| 2. 発表標題 四川涼山彝族エリート嶺光電の彝文知識形成と彝族ネットワーク |
| 3. 学会等名 新規科研プロジェクト「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討」キックオフ・ミーティング（第289回北海道大学東洋史談話会） |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計9件

| | |
|---------------------|------------------------------|
| 1. 著者名 吉開 将人（共著） | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 思文閣出版 | 5. 総ページ数 556（分担執筆135-158） |
| 3. 書名 鳥居龍蔵の学問と世界 | |

| | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1. 著者名 吉開 将人（共著） | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 雄山閣 | 5. 総ページ数 365（分担執筆89-100） |
| 3. 書名 河姆渡と良渚：中国稲作文明の起源 | |

| | |
|---|-------------------------------|
| 1. 著者名 松本 ますみ (共著) | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 明石書店 | 5. 総ページ数 261 (分担執筆238-253) |
| 3. 書名 教育とエンパワーメント (イスラーム・ジェンダー・スタディーズ (3)) | |

| | |
|----------------------------------|------------------------------|
| 1. 著者名 川田 進 (共著) | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 明石書店 | 5. 総ページ数 341 (分担執筆79-112) |
| 3. 書名 中国・台湾・香港の現代宗教：政教関係と宗教政策 | |

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 川田 進 (単著) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 集広舎 | 5. 総ページ数 240 |
| 3. 書名 天空の聖域ラルンガル：東チベット宗教都市への旅 | |

| | |
|--------------------------------------|-------------------------------|
| 1. 著者名 川田 進 (共著) | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 明石書店 | 5. 総ページ数 219 (分担執筆107-150) |
| 3. 書名 被災記憶と心の復興の宗教社会学：日本と世界の事例に見る | |

| | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 1. 著者名 川田 進 (共著) | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 北海道大学出版会 | 5. 総ページ数 350 (分担執筆3-30) |
| 3. 書名 アジアの公共宗教：ポスト社会主義国家の政教関係 | |

| | |
|--------------------------|--------------------------------|
| 1. 著者名 岩谷 将 (共著) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 稲郷出版社 | 5. 総ページ数 1060 (分担執筆229-268) |
| 3. 書名 邁向和解之路：中日戦争の再検討 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 河原地 英武、平野 達志、家近 亮子、川島 真、岩谷 将 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 東京大学出版会 | 5. 総ページ数 337 |
| 3. 書名 日中戦争と中ソ関係：1937年ソ連外交文書邦訳・解題・解説 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 川田 進 (KAWATA Susumu) (10288756) | 大阪工業大学・工学部・教授 (34406) | |
| 研究分担者 | 松本 ますみ (MATSUMOTO Masumi) (30308564) | 室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授 (10103) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 岩谷 將 (IWATANI Nobu) (80779562) | 北海道大学・法学研究科・教授 (10101) | |
| 研究分担者 | 清水 享 (SHIMIZU Toru) (90511048) | 日本大学・スポーツ科学部・教授 (32665) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |